

二〇一九年度

# 「国語」問題

## 注意事項

- 1 問題および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙の所定の欄に楷書で記入してください。
- 3 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 4 問題は1ページから14ページまでです。

〔問題二〕 次の(1)～(2)の各設問に答えなさい。

(1) 1～5の文中の——線部(a)～(h)について、漢字はひらがなで読み方を示し、カタカナは漢字に改めなさい。

1 日本国民はコウキユウ<sup>(a)</sup>の平和を念願し、人間相互の関係を支配するスウコウ<sup>(b)</sup>な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。

(日本国憲法 前文による)

2 グーグルマップは、世界や国家といった「全体社会」にくわえて、地域社会やエリアといった「ローカルな全体」を見えづらくしている。全体社会が見えづらいのは、「いま・ここ」<sup>(c)</sup>にシヨウテンをしぼることをユーザーに促すグーグルマップの「機能」のためであるが、一方、「ローカルな全体」の見えづらさは、グーグルマップの均質な「表現」<sup>(d)</sup>そのものにキインしている。

(松岡慧祐『グーグルマップの社会学』による)

3 当日雪子は姉妹たちに手伝って貰<sup>もら</sup>って三時頃から拵<sup>こしら</sup>えにかかったが、貞之助も事務所の方を早じまいにして帰って来て、化

粧部屋に詰めるという張り切り方であった。貞之助は着物の柄とか、着附<sup>きつけ</sup>とか、髪かたちなどに趣味を持っていて、女たちのそういう光景を眺めることが好きなのであるが、一つにはこの連中が時間の観念を持たないことに毎度ながら懲りているので、午後六時という約束に遅れないように監督するためでもあった。

(谷崎潤一郎『細雪』による)

4 住みにくき世から、住みにくき煩<sup>(f)</sup>いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるいは音楽と彫刻である。こまかに言えば、写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。

(夏目漱石『草枕』による)

5 スウエーデンのカロリンスカ医科大学は、ノーベル医学生理学賞を京都大学の本庶佑教授と米テキサス大学のジェームズ・アリソン教授にオク<sup>(g)</sup>ると発表した。二人は、メンエキ<sup>(h)</sup>をがんの治療に生かす手がかりをみつけ、がん治療に第四の道を開いた。

(新聞記事による)

(2) 次の「いろはかるた」の組み合わせの中で、意味がすべて正しいものをア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 一寸先は闇  
二階から目薬  
骨折損のくたびれ儲け

…これから先は不幸なことしか起きそうにない、ということ  
…意のままにならずもどかしいこと  
…努力のいかにもなく効果が上がらず、疲れだけが残ること

イ 年寄りの冷や水  
糠ぬかに釘くぎ  
果報は寝て待て

…老人が年がいもなく危ういことをするたとえ  
…何の効き目も手ごたえも感じられないこと  
…危険が通り過ぎるまでは身を低くして待て、ということ

ウ 立て板に水  
爪つめに火を点す  
寝耳ねみみに水

…すらすらとよく話すさま  
…他人から見ても、やりすぎだと思われるくらい注意深いこと  
…不意の出来事や知らせに驚くことのとえ

エ 喉元過ぎれば熱さを忘れる  
芸は身を助ける  
目の上の瘤こぶ

…苦しいことも過ぎてしまえば忘れてしまうことのとえ  
…一芸にすぐれていると、困窮したときにそれが生計の助けになる、ということ  
…何かと気に障るものや邪魔になるもののとえ

オ 身から出た錆さび  
知らぬが仏  
餅は餅屋

…自分の犯した悪行のために自ら苦しむこと  
…知れば腹も立つが、知らないから仏のように平静でいられる、ということ  
…物ごとにはそれぞれの専門家がおり、素人の及ぶところではない、ということ

〔問題二〕 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

中ごろ、伊豆国のあるところの地頭に、若き男ありけり。狩りしけるついでに、猿を一匹生け捕りにして、(a) **これ** を縛りて家の柱に結び付けたりけるを、かの母の尼公、慈悲ある人にて、「あら愛おし、いかにわびしかるらん、(b) **あれ** 解き許して山へやれ」と言へども、郎等冠者ばら、主の心を知りて、<sup>(2)</sup> **これ** を解かず。「いできらば我解かん」とて、(d) **これ** を解き許して山へやりぬ。(e) **これ** は春のことなりけるに、夏、覆盆子の盛り、覆盆子を柏の葉に包みて、暇を伺ひて、この猿、尼公に渡しけり。あまりにあはれに愛おしく思ひて、布の袋に大豆を入れて、猿に取らせつ。その後、栗の盛りに、先の布の袋に栗を入れて、隙にまた持て来る。このたびは、猿を捕らへてをきて、子息を呼びて、この次第を語りて、子々孫々までもここに猿殺さしめじと起請を書け、もしさらずは、母子の儀あるべからず」と、おびただしく誓状しければ、子息起請書きて、<sup>(3)</sup> 当時までも、ここに猿をころさぬよし、ある人語りき。

(『沙石集』より)

地頭：莊園の取り締まりをした役人  
起請：神仏にかけて誓約した文書

おびただしく誓状しければ：しつこく起請文を書かせようとしたので

問1 —— 線部(1)「伊豆国のあるところの地頭」とありますが、これと同一人物を指している語句をA～Eからすべて選び、記号で答えなさい。

- A 若き男      B 郎等冠者ばら      C 主  
D 子息      E ある人

問2  (a)～(e)のうち、その指し示す内容が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問3 —— 線部①②③は、それぞれ誰の動作ですか。組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- A ①猿 —— ③尼公 —— ④は猿  
I ①猿 —— ③猿 —— ④は尼公  
ウ ①郎等冠者ばら —— ③尼公 —— ④は猿  
エ ①地頭 —— ③尼公 —— ④は尼公  
オ ①尼公 —— ③地頭 —— ④は猿

問4 — 線部(2)「恐れて」とありますが、誰が何を恐れたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ニ公が猿の仕返しを恐れた。

イ 家来たちが地頭の怒りを恐れた。

ウ 家来たちが猿の仕返しを恐れた。

エ ニ公が地頭の機嫌を損ねることを恐れた。

オ 家来たちが仏様の怒り(仏罰)を恐れた。

問5 ㊦は会話文の終わりを示しています。その会話の最初の四文字を解答欄に記しなさい。

問6 — 線部(3)「当時までも」とありますが、いつのことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 猿を捕まえたとき

イ 猿を逃がしたとき

ウ 誓状を書いたとき

エ ある人が語ったとき

オ 将来に渡って永遠に

〔問題三〕 次の文章を八十字以上百字以内に要約しなさい。

- ① 三文で要約すること
- ② 第二文の書き出しを「しかし」、第三文の書き出しを「つまり」で始めること  
(……………。しかし……………。つまり……………。)
- ③ 解答欄の一マス目から書き始め、句読点も一字に数えること

満点の星空を見上げながら、「今日は北斗七星がよく見えるね」と隣の人に話しかけると、「私」は、隣の人も「私」と同じように北斗七星の象<sup>かたど</sup>るひしゃくの形を星空に見ている、と思っている。なぜなら私たちは、「私」が見ている客観的事実は、「私」とは無関係に存在していると信じているからだ。

だが、本当にそうだろうか。一つを除く六つの星が二等星である北斗七星は、多くの星が出ている空の中でもとても目立つ。ひしゃくの形に見えることから日本ではそれを意味する「斗」の字が充<sup>あ</sup>てられている。あるいは、ロシアには次のような民話がある。日照り続きの中、娘が病気の母親のためにひしゃくを持って、山奥まで水を汲<sup>く</sup>みに行った。娘は家に帰る途中で、水を欲しがると犬やおじいさんに会い、母親のための水を与えてしまう。娘はそのたびに、山奥まで水を取りに戻るのであった。夜半過ぎに、娘がようやく母親に水を飲ませると、ひしゃくから七つのダイヤモンドが飛び出し、さらにきれいな水がほとばしり出たという。ダイヤモンドは空に舞い上がり、北斗七星

となった。このような民話を知っていても知らなくても、私たちは北斗七星がひしゃくの形、と知っているから暗い星空の中に「ひしゃく」が見えるのである。世界にはそこに車の形を描いたり、熊の尻尾の形を描いたりする地域もある。私たちは何の規則性もない星の間に、勝手に線を引き、ひしゃくどころか、獵師を見たり、さそりを見たりするのだ。そう考えると、私たちは見たいものを見ているだけだと言える。

見るものだけではない。カクテルパーティ現象という言葉を知っているだろうか。多くの人が雑談していたり、音楽が流れていたりする場所であっても、私たちは自分と会話している相手の声を聞き取って、コミュニケーションをとっている。実は、このような場所で録音をしたものを聞いてみると、周囲の音が邪魔をして、聞きたい相手の声を聞くことはかなり難しい。私たちは、自分にとって必要な音源の位置と種類だけを理解するように出来ているのである。もつと言えば、周囲の状況や会話の流れに従って聞き取れない内容を補完したり、自分の都合のいいように聞き違えたりして、相手の話が「聞こえている」と思っているだけなのだ。

こうした例を見てみると、「私が見ているもの」は「私が見たいもの」であり、「私が聞いていること」は「私が聞きたいこと」だとさえ、誰にでも同じものが見えたり聞こえたりしているわけではないことが分かる。「私」は「私」にだけ存在する虚構に満ちた世界を生きている。だからあなたの隣にいる人があなたのことを理解してくれないのは当たり前なのである。

(本文は本校で作成した)



〔問題四〕 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

【1】 私たちはしばしば「この政治のやり方は民主的ではない」とか「今の社会は民主的ではない」と言う。「民主的」という形容詞が用いられる時には、「民衆による支配」という民主主義の定義がぼんやりとイメージされつつ、政治のやり方や社会が自分たちの手元から見てどれだけ近くにあるかが判断されている。「民主的ではない」という判断は、その対象が民衆の手元から相当程度離れてしまっていることを言わんとしている。要するに、社会や政治が時の権力者などによって支配されていて、民衆に為す術がないときにこのような言い方が用いられる。「民主的」という形容詞は、したがって、自分たちの手元から見て判断を下す際に用いられる言葉である。

【2】 それに対し、「この国には民主主義がない」とか「民主主義を実現しなければならぬ」などと言われることもある。この場合には<sup>(1)</sup>「民主主義」という名詞は、ある実体としてイメージされ、前提されている。何か到達点としての民主主義が既に明確に存在しており、その到達点にすぐにも到着しなければならぬのに、それがなされていないということである。つまり、「民主主義」という名詞が用いられる場合には、手元からではなく、どこか遠いところから判断が下されている。到達点の理想状態に視点が置かれているのだ。

【3】 以上の簡単な分析から分かるのは、「この国は民主的ではない」という言明と、「この国には民主主義が欠けている（だから民主主義を実現しなければならぬ）」という言明は、同じようなことを述べているように見えて、実は全く異なる視点から、全く異なることを述べているということである。<sup>(2)</sup>前者は手元から判断が下されている。後者はどこか遠いところから判断が下されている。前者は実感から出発して、後者は概念から出発していると言ってもよいだろう。

【4】 実感は自然と出てくるものである。そしてこのような感覚は、現実を批判的に検討する出発点になる、とても大切なきっかけである。この感覚は何としてでも守り抜かねばならない。そこに民主的でない何かがあるのであり、それは人に不満を与えたり、人を不幸にしたりするのだから。

【5】 ところが、そうした実感が時折、概念を経由することによって手元から離れていってしまうことがある。「民主的でない」という実感や感覚が、「民主主義」という概念を経由して変貌し、何らかの実体を求める要求になってしまうことがあるのだ。

【6】 「民主主義が欠けている」とか「民主主義を実現しなければならぬ」という言明は、「民主主義」という名詞を用いている以上、到達点としての民主主義の実体を前提としている。だが、その実体はいったい何を指しているのだろうか？そもそも民主主義に実体はある



のだろうか？それはあらかじめ明確に定義できるような政治体制なのだろうか？

【7】「こういう政治体制が民主主義である」という明確な定義をもっている人もいるかもしれない。しかし、議会制民主主義が達成されても社会はまだ十分に民主的ではないのだから、そのような明確な定義をもつことは非常に難しいと言わねばならない。民主主義の完成した姿を描くことは、独断的であることを避けられないだろう。

【8】ならば、民主主義が完成した姿を描くことはできないのに、民主主義を实体として要求することはどういう事態を生み出すだろうか？

【9】一方で、民主主義が何なのかは分からず延々と要求だけを繰り返すということが考えられるだろう。たとえばそのような思いを共有している仲間たちと「民主主義を実現しよう！」と言い合っているという事態である。

【10】他方で、実体の中身が空っぽであることに耐えられない人たちが出てくるのが予想できる。そうした人たちは自分では民主主義の完成した姿を思い描けはしないのだが、完成した姿がほしくてたまらない。すると、誰か他の人が作った完成像にすぎることになる。もちろん、そのような完成像は独断的であろう。

【11】 感覚的判断（「民主的ではない」）から、

A 的判断（「民主

主義が欠けている、だから民主主義を実現しなければならぬ」への移行はこのような大きな問題を引き起こす場合がある。手元にあつた判断がどこか遠くに持ち去られる時、大きな過ちが犯される可能性があるのだ。

【12】「こんな社会はおかしい」という感覚を抱き、この社会を何とかしようと思いつ人は少なからずいる。しかし、その人がふと気がつくとき、特定の概念のために奉仕するだけになっていることがありうる。しかもその概念が実現された時、その人が最初に抱いた感覚とは全く異なるものが姿を現すことがしばしば起こる。革命運動ではそうしたことが何度も繰り返されてきた。

【13】だから私たちは「民主主義」<sup>3)</sup>というこの何ものかをどうとらえるべきかについて考えておくべきである。そして、既にこの問題を徹底して考えた哲学者がいる。二〇世紀フランスの哲学者ジャック・デリダがその人だ。

【14】ここで紹介したいのは、その晩年のデリダが用いていた「来るべき民主主義」という表現である。

【15】この表現を理解する上でのポイントは、そこに二つの意味が重ね合わされていることである。

【16】まず一方でデリダは、民主主義というのは「常に来るべきものとどまる」と述べている。つまり常に実現の手前にあり、十分では

ないものであり続けるということである。もっと強く言えば、民主主義は常に来るべきものとどまるのだから、実現されてしまつてはならないと言つてもよい。どうということだろうか？

【17】 民主主義とは「民衆による支配」を意味する。誰もが民衆なのだから、民衆による支配とは、自分たちが全員で自分たち全員のことを支配するということだ。しかし、そうしたことは可能だろうか？たとえば人は自分で自分を支配することもできない。常に思い通りにはならないし、ふと気がつくと思ひも寄らなかつたことをしでかしていることなど日常茶飯事だ。そんな人間たちが集まつて、自分たちで自分たちのことを完全に支配するなどおそろくどんな制度によつても不可能である。

【18】 つまり、民主主義が完全に実現した姿を想像することはできない。したがつて、もしも誰か——たとえば権力者が——「我が国では民主主義が完全に実現されている」などと口にするものがあつたら、それは絶対に嘘である。民主主義は必ず何らかの「失敗」を伴う。また民主主義の理念と現実の間には必ず「懸隔」がある。

【19】 デリダはこう言っている。「この失敗と懸隔はまた「……」あらゆる民主主義——西洋的と呼ばれる民主主義の中で最も古く、最も安定したものも含めたあらゆる民主主義——を特徴づけるものである」。どんな民主主義もこの「失敗」や「懸隔」を免れない。だから、

この「失敗」や「懸隔」を完全に取り除こうとすること、この「失敗」や「懸隔」が全く存在しないような民主主義を——たとえば革命によつて——実現しようとすることは、実は民主主義を実現するように見えて、その実、民主主義を破壊することに他ならない。民主主義は常に来るべきものとどまるのだ。

【20】 しかし、他方でデリダは、民主主義を来らしめねばならないとも言う。「民主主義なんてどうせ無理だ」という諦念に陥つてはならない。民主主義を捨てるということは、誰か他の人間にすべての決定を委ね、決めてもらい、文句は言わないということである。「そこをどけ」と言われたらどき、「それをよこせ」と言われたら渡す、そういう社会にするということだ。

【21】 そして、現在「民主主義」と呼ばれる政治体制の中では、「そこをどけ」と言われたらどかねばならず、「それをよこせ」と言われたら渡さねばならない、そうした事態はまだなくなつていない。そうしたことが平然と行われている。すなわち、「民主主義」というこの名に値する民主主義はいまだ存在していない。民主主義が来るべきものとどまつている」。民主主義と呼ぶに足る民主主義は実現されていない。だから民主主義が目指されねばならない。この場合「来るべき民主主義」とは実現を求める命令となる。

【22】 デリダの議論は少々込み入つてるように思われるかもしれない

いが、先ほどの「民主主義」という名詞と「民主的」という形容詞から考えれば、実はさほど難しいことではない。我々は確かに「民主主義」という名詞を使うけれども、完成した民主主義の姿を描くことはできない。とはいえ、社会はもつと民主的になるべきだし、民主的にしていける。デリダはこの二つの意味を「来るべき民主主義」という一つの表現に込めたのである。<sup>(5)</sup>「民主主義」という言葉を使う時には、以上の点に留意すべきだと注意を促すために。

(國分功一郎『来るべき民主主義』より)

問1 ——線部(1)「民主主義」という名詞」について以下の問いに答えなさい。

① 「民主主義」という名詞」と対比的に用いられている語句を本文中から十字程度で探し、抜き出して書きなさい。

② 「民主主義」という名詞」の説明として正しくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「民主主義」という名詞は、私たちの「民主的ではない」という感覚から遠く離れたものである。

イ 「民主主義」という名詞は、現実を批判的に検討する出発点になるとしても大切なきっかけとなる。

ウ 「民主主義」という名詞には、明確には捉えがたい「民主主義」を、最初から実体のあるものとして捉える前提がある。

エ 「民主主義」という名詞には、「民主主義」が何なのか分からないまま、要求だけを繰り返す人々を生み出す可能性がある。

オ 「民主主義」という名詞は、「民主主義」の完成した姿を前提としており、その姿は誰かが作った独断的なものである。

問2 — 線部(2)「前者は手元から判断が下されている」とありますが、その「判断」について説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「この国は民主的ではない」という判断は、そもそも民主主義が何であるかを問い、現実を批判的に検討することから生まれたものである。

イ 「この国は民主的ではない」という判断は、民主主義を実現しなければならぬという切迫した思いから生まれたものである。

ウ 「この国には民主主義が欠けている」という判断は、政治のやり方や社会が自分たちの手元から相当程度離れているというぼんやりとした感覚から生まれたものである。

エ 「この国は民主的ではない」という判断は、この社会や政治が権力者によって支配されており、自分たちの手では何ともしようがないという実感から生まれたものである。

オ 「この国には民主主義が欠けている」という判断は、民主主義の理想状態を前提としたものであり、現時点ではそれに全く手が届かないという思いから生まれたものである。

問3 空欄 A にあてはまる語句を【3】～【5】段落から二字で探し、抜き出して書きなさい。

問4 — 線部(3)「民主主義」というこの何ものか」とありますが、ここでいう「民主主義」とはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 民衆が自分たち自身を支配すること

イ 民衆がこの社会を何とかしようと思いつくこと

ウ 民衆が民主主義の実体を空っぽであると感じること

エ 民衆が自分たちの実感からものごとを考えようとする

オ 民衆が自分たちの社会のことを民主的でないと感じること

問5 ——線部(4)「民主主義は常に来るべきものにとどまるのだから、実現されてしまつてはならない」について以下の問いに答えなさい。

① なぜ「民主主義」は「実現されてしまつてはならない」とデリダは考えているのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 民主主義は、明確に定義しづらいため、民主主義が何であるかも分からず、延々と要求だけを繰り返す人々を生んでしまうから  
イ 民主主義は、実現しようとしても、結局のところ特定の概念に奉仕することになり、当初抱いていた、社会を変えたいという感覚が失われてしまうから

ウ 民主主義は、その特徴からして必ず「失敗」を伴うのであって、「失敗」が全くない民主主義の実現は、民主主義をかえつて損なってしまうから

エ 民主主義は、その理念と現実とがかけ離れてしまうものであり、その結果、理念を離れて独断的なものになってしまうから  
オ 民主主義は、常に十分ではない状態にあり続けるものであり、そのために人々は権力者と、その権力者のつく嘘に吸い寄せられてしまうから

② ——線部(4)が含まれる【16】段落と対になる段落はどれですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 【17】段落  
イ 【18】段落  
ウ 【19】段落  
エ 【20】段落  
オ 【22】段落

問6 この文章を前半と後半で分けるとき、どの段落から後半が始まりますか。後半が始まる段落と前半と後半の内容についてまとめたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 前半部分で民主主義を实体として捉えることは何がいけないであろうかと問題提起した上で、【9】段落目から始まる後半部分では、その問題点を「名詞」という言葉を使って明らかにしている。

イ 前半部分で「民主的」でないという感覚的判断から、「民主主義」という概念への移行がもたらす問題点を指摘した上で、【12】段落目から始まる後半部分では、「民主的」でないという感覚的判断もまた、民主主義を損なう可能性があるかと警鐘を鳴らしている。

ウ 前半部分で「民主的」と「民主主義」との違いを説明した上で、【13】段落目から始まる後半部分では、民主主義をどのように捉えていったらいいかについて「来るべき民主主義」という言葉を中心に論を展開していく。

エ 前半部分で筆者の考える民主主義とデリダの「来るべき民主主義」の共通点を示した上で、【14】段落目から始まる後半部分では、両者の違いを実現が可能であるか否かという観点から論じている。

オ 前半部分で民主主義を目指すことは不可能であり、あきらめなくてはならなくなった理由を述べた上で、【20】段落目から始まる後半部分では、そうであるにもかかわらず民主主義をあきらめてはいけなかが語られている。

問7 — 線部(5)「民主主義」という言葉を使う時には、以上の点

に留意すべきだ」とありますが、筆者はどのようなことに「留意」しなくてはならないと言っているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「民主主義」という言葉を使う時には、完璧な民主主義は存在しないことを前提としつつも、「民主的ではない」という実感から離れてはいけないということ

イ 「民主主義」という言葉を使う時には、民主主義のどの部分が欠けているのかを自覚しながら、民主主義の完成を求め続けなくてはならないということ

ウ 「民主主義」という言葉を使う時には、民主主義が失敗することを予想しつつ、失敗を受け入れるあきらめの姿勢をもつべきであるということ

エ 「民主主義」という言葉を使う時には、民主主義の実現を求めめるのではなく、あえて現状にとどまり続ける気持ちをもつべきであるということ

オ 「民主主義」という言葉を使う時には、民主主義を自分たちの手に取り戻すために、民衆自身が民主主義の定義を明らかにしなくてはならないということ

(以下余白)

